

メトロポリタン + プラス

本紙連載「日本図の変遷」赤水から伊能へ」(2022年10月〜23年3月)で紹介した江戸時代の地理学者、長久保赤水(1717〜1801年)への注目度が増している。21日からは出身地、茨城県高萩市で資料展(示会)が開かれる。

(小幡勇弘)

「日本地図の先駆者 長久保赤水の足跡」と題して講演する佐川春久さん=9月1日、東京都品川区で



長久保赤水は伊能忠敬より42年も前に日本地図「改正日本輿地路程全図」を完成させた。江戸時代、伊能図は幕府の秘図だったため、庶民はもっぱら赤水図を愛用していたという。

両図の違いは伊能図が「測量図」で、赤水図は「編集図」であること。赤水自身が集めた地名や河川や山など

日本地図の先駆者 長久保赤水 高萩で資料展

も盛り込み、内陸部の情報も豊富だ。ただ、伊能図に描かれた蝦夷地(現在の北海道)が別図(蝦夷之図)のため、教育現場では伊能図が主流になっていたようだ。2020年、赤水関連資料693点が国の重要文化財(重文)に指定された。これをきっかけに赤水図が中学校の教科書に掲載され、高萩市では地図のレプリカが教材として使われるようになった。

「重文指定資料すべてに目を通した」という長久保赤水顕彰会会長の佐川春久さん(74)は今夏、東京都内で初めて品川区主催の講演会で講師を務めた。赤水の生い立ち、赤水図完成までを紹介。参加者は「初めて赤水の名前を知った」人が多く、「伊能忠敬以前に地図を作った人がいたことが驚き」などの感想が寄せられた。佐川さんは「まだまだ知名度が低い現実を痛感させられた」という。

佐川さんは「高萩市が製作した和泉元彌さん(狂言師でタレント)主演映画『その先を往け! 日本地図の先駆者長久保赤水』(QRコード)をぜひ見てほしい」と話す。修復された重文資料を含む展示会は、高萩市歴史民俗資料館で12月10日まで。

